



石垣市の井戸の変遷を見ると、白保の真謝井戸、宮良のアダドゥーナー、平得のパイナーカーなど、水面近くまで人が降りて直接水を汲む「降り井戸」から、釣瓶(つるべ)を利用する「掘り抜き井戸」へ変化したものと考えられる。降り井戸は、自然的地形に左右される湧水利用のため、場所が限定されるのに対し、掘り抜き井戸は水脈に対する知識と掘削技術を有すれば、多くの場所で水を得ることが可能となる。このことは、村落の生活に利便性をもたらすとともに、疾病の予防にも貢献したものと考えられる。

本市においては、掘り抜き井戸の開始期は 1694 年頃である。それから 60 余年後の 1757 年に掘られた世持井戸は 17.2m の深さを有し、本市の掘り抜き井戸の中では屈指の深さを測る。掘削技術の進歩があったものと思われるが、この技術がどのように継承され、また、掘り抜き井戸がどのように普及していったかについては不明な点が多く、これからの重要な研究課題とされている。

なお、世持井戸が掘られた 1757 年は大川村が創建された年であるが、初代の与人(村役人の筆頭)である松茂氏 6 世當儀は、世持井戸を掘り用水の不便を解消したことなどの功績により、1762 年に首里王府から褒賞されている。

世持井戸は、上水道が無い時代から今日に至るまでの用水の確保、利用方法など、本市の生活史を解明するに欠かせない貴重な場所であることから、石垣市の文化財に指定されている。